

## 日本ツバキ紀行 17

### 横山三郎ツバキコレクションを訪ねる

龍ヶ崎市 小泉不二男

7月31日、神奈川県座間市に横山三郎氏のツバキコレクションを訪ねた。

1週間ほど前、日本ツバキ協会の理事仲間の高野末男氏より、コーベ・カメラリア・ソサエティの森田章介会長が旧横山三郎邸にツバキの穂木を採りに来るので、急ですが参加しませんかとの電子メールが届いた。

横山三郎氏といえば、協会の会長も務められたツバキの大御所。座間市の広大な自宅敷地にツバキを植えられていたことで知られていた。ご健在のころに協会の見学会が開かれ、サッカー場のような芝生や見切れないほど多数のツバキのことは昔語りのように当時の参加者から聞いていた。見学会はかれこれ40年近く前のことになるようだ。

ご逝去後、そのツバキコレクションも失われたと聞いていたので、得難い機会と思い、早速高野氏に参加希望の意向を返信した。

当日、東京の予想最高気温は34度。異例の6月梅雨明け以来、日本最高気温が更新されるほどの猛暑がすでに1ヶ月も続いていた。

涼しいうちの9時過ぎに佐貫駅から電車にのり、新宿から小田急線相模大野で乗り換え、南林間駅11時半下車。家内が持たせてくれた海苔巻き弁当を風の通るホームのベンチで食べ、西口タクシー乗り場で森田会長と落ち合う。猛暑の炎天下、汗を拭きつつ上五島椿サミット以来の久闊を叙しているところに折よく来たタクシーで5分、旧横山邸着。



旧横山邸 周囲は住宅街



園内の樺、榎、桜の高木

旧横山邸は、密集した家並みに忽然とあらわれた森林公園の趣だった。ツバキを中心に鬱蒼とした緑に覆われ、その中に建物らしきものも見える。

周囲の立て込んだ住宅地とはまるで別世界。

後で知ったが、もともとこのあたりは、馬車で行き来するような農村が次第に都市化し住宅街に一変したようだ。

このことを教えてくださったのは、横山氏の親族の香春（かはる）さん。この地に長く住まわれていたが、都市化の波がさらに押し寄せ、今回移転することになったという。もとの敷地はさらに広大であった由。

失われて行く横山コレクションを惜しむように集まったのは7人。

貴重なツバキに気づかれて連絡元になってくださった株式会社植源の立木（ついき）秀希さん、さらに連絡をしていただいた理学博士で樹木医の正木伸之先生は静岡の磐田から、はままつフラワーパークの田中克明さん達は浜松市花みどり財団から、さらに正木先生の関係から旧知の牛久市の川原田邦彦氏も参加され、久しぶりにお会いした。今もNHKの趣味の園芸の講師を務められ、相変わらずお忙しそうだ。かつて茨城つばきの会で一緒に活動した仲でもある。

ちなみに森田会長に連絡を入れてくださったのは、正木先生の樹医仲間の安田邦男服部緑地都市緑化植物園前副園長。コーベ・カメラの椿展会場の関係でのお知り合いという。多くの方をリレーしていただいて今回の椿行に参加できた。



参加一同（左2人目森田会長）



穂木採りの様子（左）川原田氏

今回の主目的は、挿し木用穂木の採取。森田会長も持ち帰り用の段ボールの箱を京都府亀岡のご自宅から持参。事前に送ってもらった横山邸のツバキの一覧表から、珍しい洋種をリストアップされていた。

当方もリスト中に「稲負鳥」を見つけ、期待するものがあった。

稲負鳥は、「伊藤椿花集」（明治12年）において都鳥・呼子鳥とともに三

鳥として称されていたが、昭和48年の協会の会誌において横山氏が「私には幻の花となった」と皆川椿花園の母樹が失われたことを惜しまれた古品種であった。

ところがその5年後、52年の号の表紙を稲負鳥が飾り、横山氏が解説で、皆川椿花園で枯死後は絶種したものと思われていたが、宝塚市の金岡椿樹園に渡った1本の苗が生かされ花を見るにいたったと報告し、貴重品種としての保存と増殖を訴えている。

稲負鳥についてはそれ以前に津山尚先生が著書「日本椿集」において、古今伝授あるいは古歌に詠まれた三鳥（さんちょう）（呼子鳥、都鳥、稲負鳥）に由来するとし、写生図を載せられ詳述されている。

20年近く前、稲負鳥1本を入手し、現在5mほどになっている。購入元は今となっては不明である。横山氏の増殖の呼びかけで販売されたものを購入したものだろうか。

再び世に現れた稲負鳥に気になることがある。

斑入りなのかどうかである。

古い文献には紅八重早咲大輪（椿伊呂波名寄色附、伊藤椿花集）とある。津山先生も「本来の花色は紅一色」としている。

ただ、会誌表紙の花は斑入りである。同じく横山先生の著作「日本の椿花」に載る稲負鳥も斑が入っている。

日本椿集にも、斑入り花が載っている。二口義男画伯の写生画になる。



稲負鳥（日本の椿花より）



稲負鳥（日本椿集より）二口義雄画

画伯は、その序で、昭和30年東京上野の国立博物館で催されていた椿の展示会を見学し、なんとも美しいものと感じ、会期中毎日博物館に通いスケッチし、会終了後には皆川治助氏を安行の椿花園に訪ねたという。その後毎年シーズンになると、安行への往復をくりかえしたと述懐されている。

そして写生画が溜まってきた昭和35年、治助氏に博物館に来ていただき、それまでに描いた絵をひと通り全部目を通してもらった、とある。惜しいことに稲負鳥の絵には、この翌年の、1961年3月19日、皆川とあるので、このときの博物館での監修は受けていないようだ。その点を「本図は皆川治助の生前に、彼から与えられた花を描いたもの」と津山先生は補っている。

疑義を感じたであろう先生は、「本図のものに合致する記載は今のところ得られないが、参考として「稲負鳥」の名のもとに、ここにとどめ、後の研究に待つ」と書かれた。

その稲負鳥がリストの中にあっただけだった。

「欲しい穂木はありますか」との立木さんからの申し出に甘えて、高野氏の希望があった貴公子を見つけてもらって高野氏へのお礼ができたところで、稲負鳥を口にする、と、栽植図をもとに探し始めてくれた。これに香春さんも加わり、それとおぼしき木から枝を採取できた。

皆川椿花園から金岡椿樹園に渡り、のちに横山邸に引き継がれた稲負鳥を育て、茨城のものとは比べ、さらには「後の研究に待つ」とした斑入りの点を自分なりに確かめたいところだ。



栽植図をもとに穂木を採取



道の両側もツバキ

横山元会長の著述としては、協会誌に13年に亘り連載された「椿雑談」がある。初号の戦時中のツバキについての味わいのある随筆などは繰り返し読んだものだ。品種研究に関するものが多いが、中には混乱する品種の整理に腐心された当時の様子が伝わるものもあり興味深い。

さらに氏には「日本の椿花」（淡交社）がある。

桐野秋豊先生との共著で出版は平成元年。愛好家が座右の書とするほど充実した図鑑である。中でも写真は秀逸で実物以上に魅了される。枕元で毎晩

広げたという愛好家は私一人ではないだろう。

その桐野先生も今は亡い。香春さんによればマンションとなっている隣地のあたりに数年間お住まいになっていたという。そのことは先生から直接聞いたこともあり、また先生が書かれた横山邸での品種の鑑定の思い出を何かで読んだこともある。前掲の「椿雑談3」昭和47年の号に横山氏も

「東京の騒がしさと公害を避けて神奈川県の田舎に移ってからはやくも三年余りになった。林間の一軒家をおとなう客人は少なく、ふだんは老夫婦きりの静かなつましい明暮である。 (略) 幸いなことには今年の五月から桐野秋豊氏が「こどもの国」勤務の都合上近くに引越してこられた。おかげで氏のツバキについての造詣に触れて種々の教示を受けることができ、豊富な資料を拝見して六十才の手習いよろしく新たにツバキへの関心が湧きおこる次第である。私にながい間抱いていた鋸葉椿と柊葉椿についての疑問がとけたことも桐野氏にこうむるかたじけない学恩の一つである。さて・・・」と記されている。

両先生のツバキ研究が「日本の椿花」に結実し、そのことにこの椿園が果たした役割は小さくはないだろう。採録された写真もこの地で撮られたものもあろう。そのような場所が残っているうちに訪れることができたことは幸運である。

暑さが一向に衰えない3時過ぎ、植栽図をもとに多くの穂木を収穫された皆さんで集合写真を撮り、貴重な機会を設けていただいた香春さん、立木さんにご挨拶をして辞去した。

ツバキ流行の一時代を象徴する横山ツバキコレクションも時節の変化とともに失われ、当時を知る人も少ない。桐野先生にお聞きしておけばよかった、とまたいつもの思いが去来する。往事茫茫、歲月人を待たずの感が今日も深い。